

第1章

本構想策定に係る意見・要点の整理

1. 平成27年度有識者会議報告書の概要
2. アーカイブ拠点施設で伝えていくこと、果たすべき役割等
についての整理
3. 本構想策定における関連会議やアンケート調査からの意見

本章では、序章で述べた本構想策定の経過を踏まえ、いただいた意見を分析し、アーカイブ拠点施設で伝えていくこと、役割等についての整理を行いました。

整理に当たっては、本構想策定における関連会議やアンケート調査（以下に示す（1）～（6））の意見を参考にしています。

- （1）平成27年度有識者会議報告書
 - （2）基本構想策定検討会議
 - （3）平成28年8月20日（土）開催
“ふくしまの記憶と記録、未来に伝えるシンポジウム”
 - （4）東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設基本構想策定に係る市町村意見交換会、アンケート調査
 - （5）第58回新生ふくしま復興推進本部会議
 - （6）福島県イノベーション・コースト構想の具体化に関する県・市町村検討会議（平成28年度開催分 第8回、9回、10回）
- （参考）イノベーション・コースト構想推進企業協議会との意見交換

1. 平成27年度有識者会議報告書の概要

有識者会議からの報告書では、アーカイブ拠点施設を世界初の甚大な複合災害を経験した福島がその記録と教訓を伝える場として、また、この災害から復興し、人々が集うシンボルとなる場として位置付け、基本理念及び施設の機能とエリアに関する取りまとめが行われました。

東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設

世界初の甚大な複合災害を経験した福島

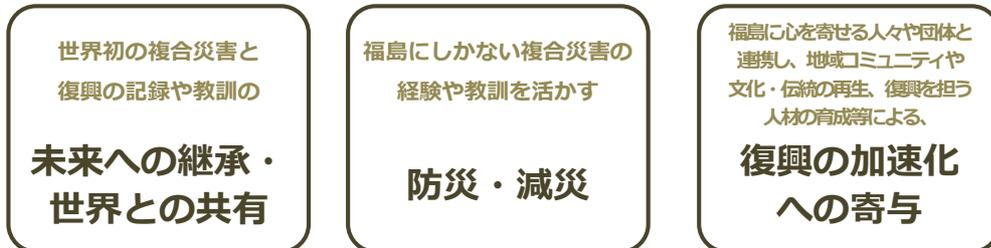
地震・津波災害

+

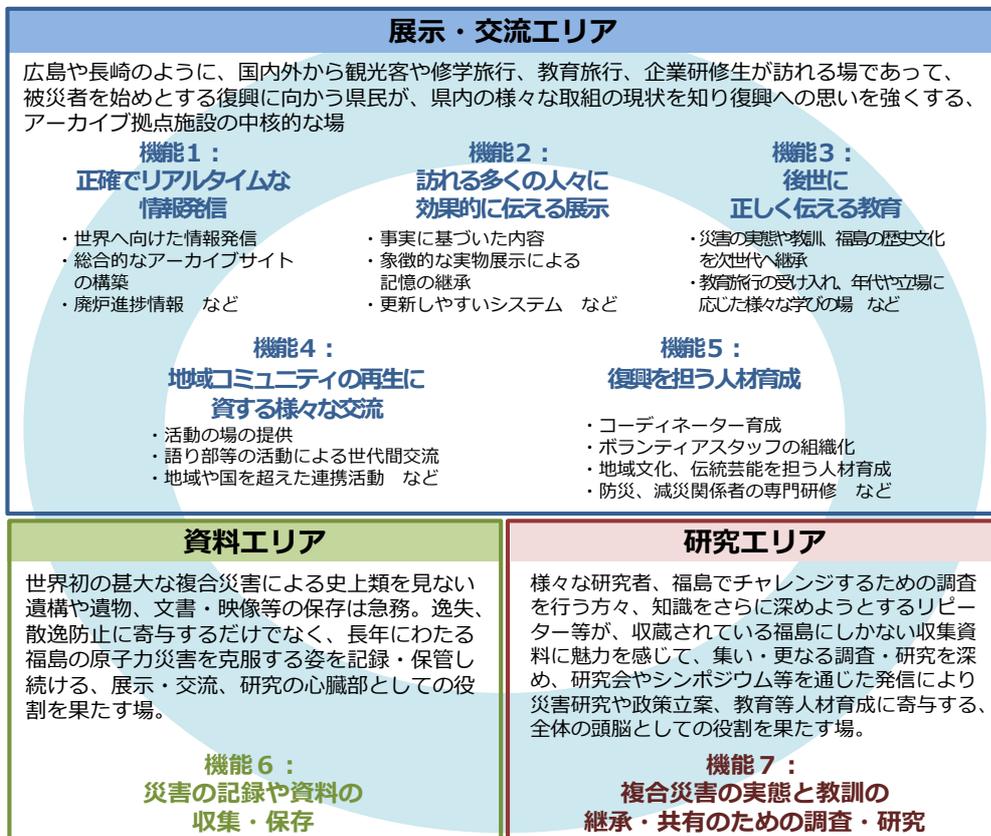
原子力災害

この災害からの復興拠点として、人々が集うシンボルとなる場

【基本理念】



【施設の機能とエリア】



2. アーカイブ拠点施設で伝えていくこと、果たすべき役割等についての整理
 関連する会議等での意見を分析し、アーカイブ拠点施設で伝えること（メッセージ）、アーカイブ拠点施設の果たす役割、アーカイブ拠点施設の展示ストーリー等を導くためのキーワードを抽出しました。

アーカイブ拠点施設で伝えたいこと(メッセージ)を導くためのキーワード
 基本構想策定検討委員/シンポジウムにおける知事・なすび氏・パネリスト意見・県民意見/県内市町村からの意見をもとに抽出

意見	福島の前とボジ、両方を伝えるべき					
	人間が抗うことができない自然災害は本当に起こり、どんな困難も人と人とがつながることで、乗り越えることができること					
	3.11、あの時の衝撃、我々のプロセス、苦しみやつらさ、復興の形、を後世に残して伝えたい。これまでと今とこれからを時系列で伝えること、そしてきちんと光と影を伝えること					
	震災を体験した人たち、特に若い世代が自分の言葉で体験や、今の想い、これから先の福島や自分の人生をどう考えるか、など発信する					
	地域の局所的な話ではなく、東日本大震災とは何だったのかということを広い視野でとらえている施設			「大変だったね、頑張ったね」ではなく、未来に向けて自分は何ができるのか、自分なりに考えることができるような、そういう伝え方が大事だし、そういう未来になってほしいと思う		
	震災時、その後、命に関わる判断を分単位で行わなければならなかった。その記録は何物にも代えがたい「資料」である。それらを活用してこそ、生きた防災研修ができるので、きちんと収集してほしい			挑戦するスピリッツ、失敗しても何度も起き上がるという、その想いを後世に、世界に伝えていきたい		
	震災の教訓、特に津波被害の記録を若い人々への防災教育に生かしていきたい			震災からの復旧・復興に向けて様々な人々が努力・協力してきた記録		
	原子力災害が起きたという事実、それによって強いられた暮らし(避難生活など)、そこから学んだこと、これらを広く伝えることによって、「二度とこのような災害を起こさない」ための知識や行動を世界に発信する施設			東京五輪開催の2020年までに各事業を確実に実施し、我が国の復興を世界に周知することは、福島の風評払拭の観点から重要な位置付けとなる		
	複合災害を受けた福島県として、特に原子力災害に対する部分に重きを置いたアーカイブ拠点施設になってほしい			わたしたちの気持ちが「悲しいことばかりじゃない」、「自分たちが働けば素晴らしい世界になるんだ」と思えるような施設がいいと思う		
	単に見世物としての施設ではなく、災害に対する危機感や災害時の相互扶助の精神の大切さを来場者に伝えられるような施設になればよい			放射線等に汚染されながらも、福島県が復興しているという姿を来場者にしっかりPRできるものになってほしい		復旧・復興に向けて協力してくれた方たちへの「ありがとう」という感謝の気持ち
アーカイブ拠点施設は、地震・津波及び原子力の複合災害の教訓を広く後世に伝える施設として確実に整備すべきである			若い世代には夢を、希望を、そして福島の将来を自信を持って担ってほしい		世界へ向けた情報の発信に加え、この災害を支援してくれた世界中への感謝の発信の場	
ここにはごく普通のコミュニティがあったということ。その日常が一瞬にして奪われたという恐怖と事実	今後、このようなことが起きてはいけなから、そのためどうしたら良いかという教訓	長い時間をかけて、前向きに発信していくことで、風評被害も変わっていく、その可能性も福島の皆さんに感じてもらいたい				
原発事故の悲しさ、失ったもの、そういうものだけではなく、素晴らしいお祭りや伝統行事があるんだということを見てほしい	残念ながら起こってしまった原発事故。その事実は正確に残し、その上でどのように復興していくのかを記録してこそ、後世に役立つ記録となり得ると思う					
ふるさとの風土、ことば、行事などを残したい	震災の記録、原子力発電所の功罪の記録、3.11の出来事の語り手の育成と記憶できる施設	原子力についての知識を学ぶ	県内にある様々な施設や活動をつなぐキーステーションとなる施設	夢を持つ、挑戦をする、その原点で誇りを持つ		
キーワード	日々の暮らしにおける安全とは何か	残す伝える	未来の安全防災	新しいふくしま復興	挑戦切り拓く	感謝世界への発信

「アーカイブ拠点施設の果たす役割」を導くためのキーワード
 基本構想策定検討委員/シンポジウムにおける知事・なすび氏・パネリスト意見・県民意見/県内市町村
 からの意見をもとに抽出

意見	3.11の衝撃、プロセス、苦しみ、復興のかたち、これらを時系列で、光も影も伝える			
	人間が抗うことができない自然災害は本当に起こり、どんな困難も人と人とがつながることで、乗り越えることができること			
	震災の教訓、特に津波被害の記録を若い人々への防災教育に生かしていきたい			
	残念ながら起こってしまった原発事故。その事実は正確に残し、その上でどの様に復興していくのかを記録としてこそ、後世に役立つ記録となり得ると思う			
	地震・津波及び原子力の複合災害の教訓を広く後世に伝える施設として整備されるべき			
	複合災害を受けた福島県として、特に原子力災害に対する部分に重きをおいたアーカイブ拠点施設になってほしい。一方で放射線等に汚染されながらも、福島県が復興しているという姿を来場者にしっかりPRできるものになってほしい			
	地域の局所的な話ではなく、東日本大震災とは何だったのかということを広い視野でとらえている施設	県内にある様々な施設や活動をつなぐキーポイントとなる施設	原子力災害は完結していない。今でもこの災害は進行形であることを伝える	県内にある様々な施設や活動をつなぐキーポイントとなる施設
	ここにはごく普通のコミュニティがあったということ。その日常が一瞬にして奪われた恐怖と事実	過去の文化財や震災遺産をつなぐアーカイブであることが重要		
	3.11事故からではなく、その前の日常から、この土地のことをきちんと伝えたい	震災を体験した人たち、特に若い世代が自分の言葉で体験や、今の想い、これから先の福島や自分の人生をどう考えるか、などを発信する		
	今後、このようなことが起きてはいけなから、事実を伝えることで、そこからどうしたらいいかという自分なりの教訓を導いてほしい	一人一人の「言葉」で語っていきけるような活動。人と人とが語り継ぐ場		前向きに、時間をかけて発信することにより、風評の払拭や福島への見方も変わるかもしれない。福島の将来に自信を持って取り組んでほしい
	震災で発生した記録や遺産は、将来的には国の財産、という姿勢をもってほしい			世界へ向けた情報発信、支援への感謝を伝える施設
	震災時、その後、命に関わる判断を分単位で行わなければならなかった。その記録は何物にも代えられない「資料」である。それらを活用してこそ、生きた防災研修ができるので、きちんと収集してほしい			
	福島の歴史、文化、自然等を国内外へ発信することは使命である			
	ここを見ることによって、未来に向けて自分は何ができるのか、自分なりに考えることができるような伝え方をしたい		ここを見ることによって、未来に向けて自分は何ができるのか、自分なりに考えることができるような伝え方をしたい	
		夢、挑戦、失敗しても起き上がる、そのスピリッツを後世に、世界へ伝えたい。ネガティブなイメージをポジティブに変えていくために、皆で挑戦を続ける、この想いを伝えていきたい		
	物だけでなく人の言葉を残したい。語り手の育成と記憶できる施設			
福島のネガとポジ、両方を伝えるべき。ふるさとの風土、ことば、行事などを残したい	残す、だけでなく、伝え続ける。希望を捨てずに前進していく、その過程を伝えたい。震災からの復旧・復興に向けて様々な人々が努力・協力してきた記録			
この地に生きてきた先人、今を生きる我々、次世代を担う子どもたちに意味のある内容にしてほしい(地域の声を十分に聴く必要性)	収集、保存、展示、啓蒙の機能を充実して、運営のための専門職員等(学芸員など)の人員配置、県内の震災・原発事故に係る情報を網羅集約できる施設を希望		地域貢献などの面から、この施設の来場者が浜通り(県内)での滞在時間を多く生み出せる仕組みづくりをしてほしい	
単に見世物としての施設ではなく、災害に対する危機感や災害時の相互扶助の精神の大切さを来場者に伝えられるような施設になればいい	被害研究拠点として、防災・減災研究の推進を行ってほしい		復興祈念公園などからの鎮魂とコミュニティづくりなどの連携促進の実施	
浜通りのみならず、広域連携が必要。そして、2020年東京五輪までに整備し、復興を世界に周知させるべき				
復興ツーリズム、拠点間連携を生かしながら、交流人口の拡大、定住に結びつけたい				

キーワード	「経験」 「教訓」 「日常」 「歴史」	「資料」 「伝え続ける」 「教育」 「防災」 「研究拠点」	「人」 「言葉」 「語り継ぐ」 「交流」	「いま」 「これから」 「進行形」 「記録」	「復興」 「最前線」 「挑戦」 「回遊」

展示ストーリーを導くためのキーワード
基本構想策定検討委員/県内市町村からの展示に関する意見をもとに抽出

【検討の経過】

第2回基本構想策定検討会議にて、展示ストーリー案を提示。

第3回基本構想策定検討会議では、第2回に寄せられた意見をもとに修正した展示ストーリーを提示。

以下の意見は、第3回資料に掲載した展示ストーリーに対して寄せられた意見を整理、分析した。

意見	3. 11の事故からではなく、その前の日常から、この土地の歴史、自然、文化、そしてごく普通の暮らしのことをきちんと伝えたい		津波、原発、賠償など、それぞれの置かれた状況で生まれた軋轢や心の整理などの記録等の展示			
	原発立地、原発事故、そして今の廃炉に向けた取組がわかるような展示		復興のスピードで潰れていく津波被害地域の声や、そこに生きた人の記録等を取り上げてほしい			
		震災当時の県内各地域の被災状況や避難所の状況などが視覚的に一目で分かる展示				
		避難をした市町村、避難を受け入れた市町村、それぞれの状況がわかるような展示をしてほしい	隔たりのないよう県内全域の被災状況・復興の様子を収集・展示すべき	広域避難の経過 避難の長期化と受け入れた避難者の方々との交流についての展示をお願いしたい	廃炉に向けた取組がわかるような展示	
		ペット、家畜の救出、文化財レスキューなど、震災後の状況を伝えるものを展示してほしい		放射線からの健康管理や食の安全、除染に関する研究についての展示	福島の今、そして現在進行形の復興の姿を発信すべき	
		世界と日本の風評状況の変遷・比較(福島だけのことなのかの問題提起)、世界の反応、報道、世界各地からの支援について取り上げてほしい				

キーワード	「ここにあった普通の暮らし」 「故郷の風景」 「原子力発電所が普通にあった」 「事故で一瞬でなくなった日常」	「原子力発電所の事故」 「想像を超えるできごと」	「避難」 「移動」 「世界からの注目」	「地域の様子」 「被災状況」 「記録」 「県内全域の様子」	「放射線の影響」 「長期化」 「健康」 「風評」	「福島の今」 「復興」

3. 本構想策定における関連会議やアンケート調査からの意見

(1) 「基本構想策定検討会議」からの意見

本構想を策定するに当たり、外部検討委員によって構成される基本構想策定検討会議を全4回開催しました。検討委員は、検討会議の他、県民シンポジウムや県民アンケートの結果に関する意見交換、建設予定地の視察へも参加しています。それらを踏まえ、本構想における事業・活動や施設の在り方、メッセージ等についての主な意見を以下に示します。

【基本構想策定検討会議における検討委員の代表的な意見】

①アーカイブ拠点施設の在り方

- ・ 県の施設として、他市町村で建設される施設とは差別化を図るべき。
- ・ 地域の局所的な話ではなく、東日本大震災とは何だったのか、ということを広い視野でとらえている施設。
- ・ 県内にある様々な施設や活動をつなぐキーステーションとなる施設。
- ・ 世界へ向けた情報発信、支援への感謝を伝える施設。

②アーカイブ拠点施設で伝えたいこと

- ・ ここにはごく普通のコミュニティがあったということ。その日常が一瞬にして奪われたという恐怖と事実。
- ・ 3. 11の事故からではなく、その前の日常から、この土地のことをきちんと伝えたい。
- ・ 今後、このようなことが起きてはいけないから、そのためにどうしたらいいか。事実を伝えることで、その教訓を自分なりの考えに落とししてもらおう。
- ・ 原子力についての知識を学ぶ。
- ・ 原子力災害は完結していない。今でもこの災害は進行形であることを伝える。

③事業・活動イメージ

- ・ 震災を体験した人たち、特に若い世代が自分の言葉で体験や、今の思い、これから先の福島や自分の人生をどう考えるか、などを発信する。

- ・一人ひとりの「言葉」で語っていけるような活動。

④資料収集や収蔵について

- ・震災によって発生した記録や遺産は、将来的には国の財産になる、という姿勢をもってほしい。
- ・過去の文化財や震災遺産をつなぐアーカイブであることが重要。
- ・資料保存については、万が一の災害に備え、安全性を十分に確保してほしい。
- ・過去に津波被害が起きた場所であるため、収集した資料の破損などが無いように、万が一に備えた建物の構造や設備上の津波対策を十分にとってほしい。
- ・震災時、その後、命にかかわる判断を分単位で行わなければならなかった。その記録は何物にも代えられない「資料」である。それらを活用してこそ、生きた防災教育ができるので、きちんと収集してほしい。
- ・個人にとどまらず、団体や企業等の行動記録やCSR活動等、この災害での様々な活動記録を残しておく必要がある。

⑤全体を通して

- ・原子力災害が起きたという事実、それによって強いられた暮らし（避難生活など）、そこから学んだこと、これらを広く伝えることによって、「二度とこのような災害を起こさない」ための知識や行動を世界に発信する施設。
- ・福島県内にある様々な復興の拠点をつなぐ回遊性や学校教育連携は重要。それらのキーステーションとなる施設。
- ・世界へ向けた情報の発信に加え、この災害を支援してくれた世界中への感謝の発信の場。
- ・3.11スタートではなく、日常、原発誘致、地域の歴史があり、そこから災害、復興へ、を、人の言葉でライブで伝えていける場。そして、ずっと後世まで、この場所の歴史や起きた事実がこれから生まれてくる新しい世代の人々にも伝わるような場。

- ・建設における留意点として、地震や津波が発生する可能性も十分に考えられる。津波については、安全性が確保された場所のようだが、一度被害を受けた場所に建てる施設として、津波への恐怖感等の来館者の心情に配慮し、建築的にもでき得る限りの耐震、浸水対策が不可欠である。

- (2) 平成28年8月20日(土)開催 “ふくしまの記憶と記録、未来に伝えるシンポジウム”からの意見

アーカイブ拠点施設の周知と県民意見収集の場として、平成28年8月20日(土)、“ふくしまの記憶と記録、未来に伝えるシンポジウム”を開催しました。シンポジウムでは、内堀知事と俳優でタレントのなすびさんによる対談、パネリストによるパネルディスカッションが行われました。併せて来場者アンケートによる県民意識・意見調査を実施しました。主な意見を以下に示します。

“ふくしまの記憶と記録、未来に伝えるシンポジウム”

【対談】～復興、未来の福島への想い～

内堀知事×なすび氏

【パネルディスカッション】

～震災から復興へ。その体験と未来へ残したいもの～

コーディネーター：菊地芳朗（福島大学行政政策学類教授）

パネリスト：蜂須賀禮子（大熊町商工会長・福島県教育委員）

関 大介（福島中央テレビ県政キャップ）

小倉祐丞（特定非営利活動法人富岡町3.11を語る会）

【内堀知事×なすび氏対談より】

(なすび氏)

- ・3度の失敗でもあきらめずにエベレスト登頂に挑んだ。自分を信じてやり続けること。それが色々な周りを変える可能性もあるということを考えて、色々な想いもある中で福島を伝え続けてきた。いい意味でも、悪い意味でも、何か福島に目を向けてもらうこと。僕がエベレスト登頂することで、少しでも福島へ目を向けてもらえたらいいと思っていた。そして、エベレスト登頂で僕のイメージが世間的に少し変わった。長い時間をかけて。それは、福島の風評被害も同じことが言えるのではないか。何か前向きに、違う形で発信できることができるかもしれない。その可能性も福島の皆さんに感じてもらいたい、ということが「ふくしまを伝えていくこと」の中で1つ大事なことだと思っ

ている。また、若い世代には夢を、希望を、そして福島の将来を自信を持って担ってほしい。マイナスからのスタートかもしれないけれど、悩むよりやってみよう。

(内堀知事)

- ・ 3.11、あの時の衝撃、我々のプロセス、苦しみやつらさや復興の形。こういったものを後世に残して伝えたい。その時大事なものは、これまでと今とこれからを時系列で伝えること、そしてきちんと光と影を伝えること。なすびさんの栄光も、その前にあった失敗や挫折、そして成功の両面を教えてくれた。夢を持つ、挑戦をする、その原点で誇りを持つ。挑戦は失敗と度胸、失敗することがあっても、やっぱり起き上がる。挑戦を続けること、継続が大切。「ふくしまを伝える」、物理的に残すものに加え、アーカイブ拠点施設で一番伝えたいのは、我々第一世代、あるいは第二世代、第三世代が挑戦するスピリッツ、失敗しても何度も起き上がるという、その想いを後世に、世界に伝えていきたい。福島は今、ネガティブなイメージ、それをポジティブなものに変えていくためには、皆で挑戦を続ける、成功するまで挑戦する、この想いをぜひ伝えていきたいと思う。



内堀知事×なすび氏 対談

【パネルディスカッションより】

- 歴史・文化・自然を伝える・発信する
 - ・福島ohの歴史、文化、自然に関わることをお民の方はもちろん、国内外の人にも発信していくことは自らの使命。
 - ・震災を機にこれまではつながりのなかった、世界の人と福島を媒介に会話ができるようになってきた。これを、この価値を逃さず私自身伝えていきたい。
- 原発事故の悲惨さと未来をつくる嬉しさ
 - ・環境創造センターの360度映像は、未来の福島の姿を伝えているというふうを感じるし、こういう映像がアーカイブ拠点施設にほしいなと思う。
 - ・来た人には原発事故の悲しさ、失ったもの、そういうものだけではなく、素晴らしいお祭りや伝統行事があるんだということを見てほしい。
 - ・見たくもない原発事故や津波の映像もたくさんあるけれど、それも心に受け止めながら、今はゼロからスタートだけど将来的には120%に、200%にと、進化していきたい。
 - ・施設に入って行く時、出て行くとき、わたしたちの気持ちが「悲しいことばかりじゃない」、「自分たちが動けば素晴らしい世界になるんだ」と思えるような施設がいいと思う。
- 深く「考える」
 - ・伝えていくことで未来はどうなるか。
 - ・可哀想と思われる伝え方ではいけない。ニュースを見ている人が他人事と思わないでほしい。ニュースを見た人が自分は何ができるのかと考えてほしい。
 - ・福島のことをきっかけに脱原発を唱える人は増えたが、その人たちが必ずしも全員これまでの電力使用を考えて、節電するとか行動に移すところまでいっている人は少ない。結局は他人事に感じている。
 - ・今後どうしていきたいのかというと、ニュースをきっかけに深く考えてほしいし、そういう世の中にしていきたい。

- 未来に向けて何ができるか考える施設
 - ・ アーカイブ拠点施設を見た人が、「大変だったね、頑張ったね」ではなく、未来に向けて自分は何ができるのか、自分なりに考えることができるような、そういう伝え方が大事だし、そういう未来になってほしいと思う。
- 急ぎすぎる
 - ・ 富岡町がなくなるのは嫌だ。でも若い世代は「じゃあ帰ろう」とは言えない。放射線の影響も怖い。帰るばかりではなく、ふらっと立ち寄れる、くらいからはじめるとだんだん帰る人も増えるのではないか。今回の震災の復興は長い目でみたほうがいい。ご年配の方々のすぐに帰りたいという気持ちもわかるけど、でも急ぎ過ぎだと思う。若い世代は帰ることを考えてしまうし、帰れない人もいる。



パネルディスカッション

【シンポジウムアンケートによる県民の代表的な意見】

- ・物だけでなく、人の言葉を残したい。
- ・福島ネガとポジ、両方を伝えるべき。
- ・残すだけでなく、伝え続ける。
- ・ふるさとの風土、ことば、行事など残したい。
- ・希望を捨てずに前進していく、その過程を伝えたい。
- ・人間が抗うことができない自然災害は本当に起こり、どんな困難も人と人がつながることで、乗り越えることができることを伝え、教訓として残したい。
- ・震災の教訓。特に津波被害の記録を若い人々への防災教育に生かしてしていきたい。
- ・震災からの復旧・復興に向けて様々な人々が努力・協力してきた記録。復旧・復興に向けて協力してくれた方たちへの「ありがとう」という感謝の気持ち。
- ・残念ながら起こってしまった原発事故。その事実は正確に残し、その上でどのように復興していくのかを記録としてこそ、後世に役立つ記録となり得ると思う。
- ・震災前と震災後（震災の記録や教訓などの継承の状況）。
- ・人と人が語り継ぐ場を残してほしい。
- ・震災の記録、原子力発電所の功罪の記録、復興の記録、3.11の出来事の記憶、そしてそれを語る人の育成ができる施設。

(3) 県内市町村からの意見

県内市町村における、資料・記録の収集・保存、活用に関する取組状況、「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点（仮称）」に係る意見収集をしました。その上で、平成29年1月には意見交換を行っています。

各市町村よりアーカイブ拠点施設への要望として挙げられた主な意見を以下に示します。

- 平成28年4月市町村アンケート
- 平成28年7月被災12市町村ヒアリング
- 平成28年12月市町村アンケート
- 平成29年1月市町村意見交換会



意見交換会

【アーカイブ拠点施設 展示に関する意見】

①原発事故、津波被害

- ・津波、原発、賠償など、それぞれの置かれた状況で生まれた軌轢や心の整理などの記録等の展示。
- ・震災当時の県内各地域の被災状況や避難所の状況などが視覚的に一目で分かる展示。
- ・原発立地、原発事故、そして今の廃炉に向けた取組が分かるような展示。
- ・復興のスピードで潰れていく津波被害地域の声や、そこに生きた人の記録等を取り上げてほしい。
- ・隔たりがないよう県内全域の被災状況・復興の様子を収集・展示すべき。

②避難

- ・避難をした市町村、避難を受け入れた市町村、それぞれの状況が分かるような展示をしてほしい。
- ・広域避難の経過、避難の長期化と受け入れた避難者の方々との交流についての展示をお願いしたい。

③風評被害対策、復興への取組

- ・世界と日本の風評状況の変遷・比較（福島だけのことなのかの問題提起）、世界の反応、報道、世界各地からの支援について取り上げてほしい。
- ・放射線からの健康管理や食の安全、除染に関する研究についての展示。
- ・ペット、家畜の救出、文化財レスキューなど、震災後の状況を伝えるものを展示してほしい。

【アーカイブ拠点施設に関する意見】

①運営に関する要望

- ・常に市町村と調整を取り、「地に足がついた」内容にしてほしい。
- ・収集、保存、展示、啓蒙の機能を充実して、運営のための専門職員（学芸員など）の人員配置、県内の震災・原発事故に係る情報を網羅集約できる施設を希望。
- ・地域貢献などの面から、この施設の来場者が浜通り（県内）での滞在時間を多く生み出せる仕組みづくりをしてほしい。

②施設の内容に関する要望

- ・複合災害を受けた福島県として、特に原子力災害に対する部分に重きをおいたアーカイブ拠点施設になってほしい。
一方で放射線等に汚染されながらも、福島県が復興しているという姿を来場者にしっかりPRできるものになってほしい。
- ・この地に生きてきた先人、今を生きる我々、次世代を担う子どもたちに意味のある内容にしてほしい。（地域の声を十分に聴く必要性）
- ・単に見世物としての施設ではなく、災害に対する危機感や災害時の相互扶助の精神の大切さを来場者に伝えられるような施設になればいい。

③各施設との連携に関する要望

- ・被災研究拠点として、防災・減災研究や、復興祈念公園などからの鎮魂とコミュニティづくりなどの連携促進の実施。
- ・市町村で整備する施設と連携、役割分担を行いながら、それぞれの施設での教訓を効果的に発信していきたいと考えている。

④資料収集に関する要望

- ・早めに、アーカイブ収集を実施していかないと、復興に伴い、なくなってしまう。

(4) 第58回新生ふくしま復興推進本部会議（平成28年8月29日）

災害の記録や教訓の継承・共有の場としてふさわしく、複合災害の情報発信の役割を果たすこと、復興拠点としての貢献度が高く、復興祈念公園と連携できる場として、以下の理由から「双葉町中野地区」を建設地とすることを、第58回新生ふくしま復興推進本部会議にて決定しました。

①建設予定地の選定理由

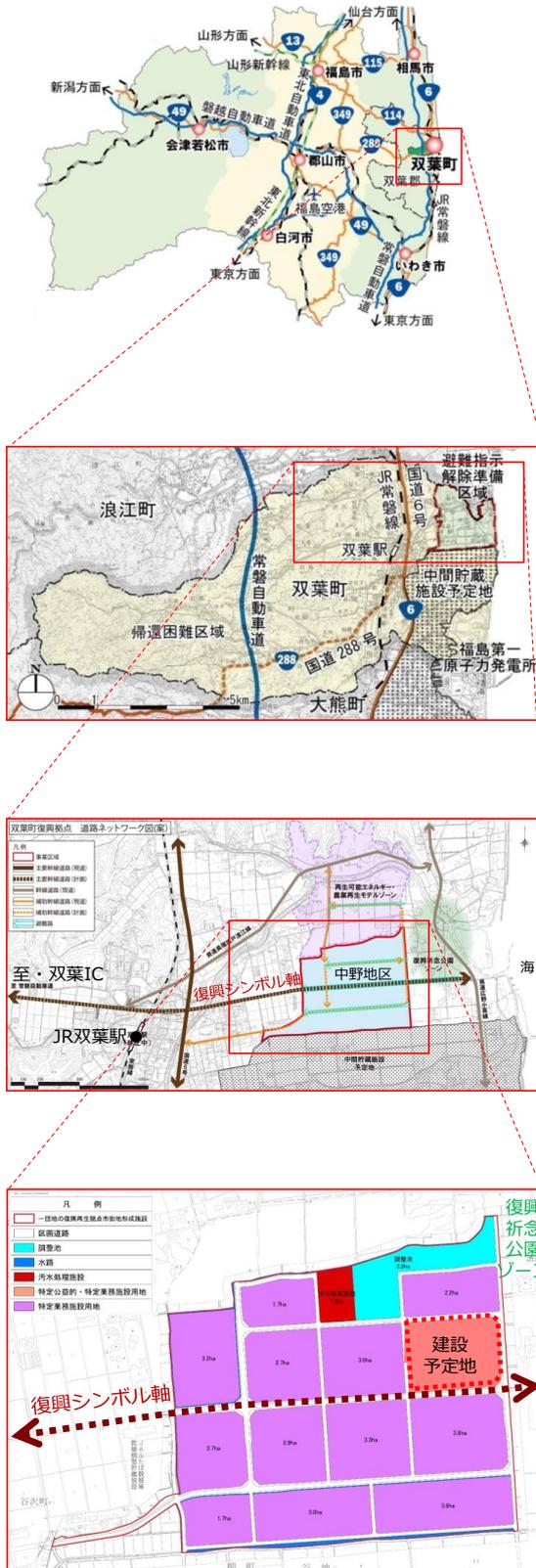
- ・世界初の複合災害と復興の記録や教訓の未来への継承・世界との共有の場として妥当であり、原子力災害を含む複合災害の情報発信拠点として、福島第一原子力発電所の立地町区域である。
- ・当該用地は、一団地の整備事業としての計画が示されている。
- ・双葉町には他の復興拠点等がなく、この地区にアーカイブ拠点施設を整備することにより、復興の加速化に寄与する貢献度が高いと考えられる。

②建設予定地概要

双葉町では、帰還に向けたまちづくりを検討・推進しています。その中でも、敷地のある中野地区は、双葉町復興まちづくり長期ビジョン（概要版・平成28年3月）において帰還後の復興産業拠点として位置付けられています。

建設予定地	双葉郡双葉町大字中野地内
周辺環境	<p>常磐自動車道浪江ICから約1.2km、双葉IC（仮称・平成31年完成予定）から約7km、JR常磐線双葉駅（休止中）から約2km。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北部：調整池及び污水处理施設に隣接している。 ・西部：特定業務施設用地に隣接している。 ・南部：特定業務施設用地に隣接し、中間貯蔵施設と近接している。 ・東部：復興祈念公園予定地に隣接している。

建設予定地の位置図



①福島県全域

双葉町は、福島県の浜通り地方に位置しており、福島イノベーション・コースト構想の一翼を担う地域である。

②双葉町全域

双葉町の南東は、福島第一原子力発電所が立地している。原子力発電所事故の影響で、帰還困難区域に指定されたエリアもある一方、北東部は避難指示解除準備区域に指定され、復興に向けたまちづくり計画が進められている。

③双葉町復興まちづくり長期ビジョン

双葉町の復興まちづくり長期ビジョンの中で、再開を予定する双葉駅や、双葉インターチェンジ（平成31年度完成予定）とを結ぶ復興シンボル軸の上に、中野地区はある。中野地区の東側（海側）には、復興祈念公園の予定地となっている。

④中野地区復興産業拠点

避難指示解除準備区域であり、かつ、津波被災リスクが少ない中野地区は、町の復興のさきがけとなる「復興産業拠点」として整備される。また、アーカイブ拠点施設の建設予定地には、町の産業交流センター（仮称）の建設も予定されている。建設予定地の東側は、道路を挟み、復興祈念公園ゾーンとなっている。

- (5) 「福島県イノベーション・コースト構想の具体化に関する県・市町村検討会議」(平成28年度開催の第8回、9回、10回)からの意見
平成26年11月に設置された本会議の第8回、9回、10回が本年度開催されました。新年度に向けて、県より、県内市町村に福島イノベーション・コースト構想の取組内容及び推進強化について説明し、意見交換を行いました。中でもアーカイブ拠点施設に関して挙げられた意見を以下に示します。

【第8回会議での意見】

- ・アーカイブ拠点施設は、地震・津波及び原子力の複合災害の教訓を広く後世に伝える施設として確実に整備すべきである。
- ・構想を、東京五輪開催の2020年までに各事業を確実に実施し、我が国の復興を世界に周知することは、福島の風評払拭の観点から重要な位置付けとなる。
- ・これらを達成するには、浜通りのみならず周辺地域を加えた広域的連携が必要不可欠であると考えます。それぞれの市町村の実情に合わせた幅広い支援を要望する。

【第9回会議での意見】

- ・福島イノベーション・コースト構想に基づいた各種拠点整備事業については、着実に取り組んでいると感じている。一方で、整備が点であり、浜通りの再生には「拠点と拠点」との連携をより強化する必要性が感じられる。
- ・復興ツーリズムということで、構想の拠点の中でも、ロボットテストフィールドやアーカイブ拠点施設、その他の施設についても復興という目に見える部分であるので、それを生かしながら交流人口の拡大を図って、定住に結びつけたいと思っている
- ・各市町村と協力して、知恵を出し合いながら進めていきたい。

【第10回会議での意見】

- ・アーカイブ拠点施設を含め、企業、周辺自治体と共有、連携しながら、2020年に「福島がここまで来た」を発信していか

なければならない。

- ・オリンピックイヤーを過ぎても継続して取り組むことが必要。
- ・情報発信の強化は、アーカイブ拠点施設における構想全体の発信と、各自治体各拠点からの発信との連携を円滑に図ることが大事。そのための情報収集や共有に関する体制、各拠点の運営方法などについて定期的な意見交換の場が必要。その際には推進法人を中核として、すべての自治体が参加してアイデア出しをすることが必要。
- ・拠点連携の推進について、例えば各拠点で開発したロボット技術を競うロボットコンテストをその開発拠点だけではなく、持ち回りで開催する等が考えられる。見学に来られた方を各拠点へ誘導できるようにする。県主導で各市町村が参加して議論していくべき。
- ・アーカイブ拠点施設における資料収集は、世界への発信であれば相当の資料収集になると思う。広域的にどのような体制で進めていくのか。
- ・アーカイブ拠点施設は、外観、内装含めた空間のデザインが大切である。隣接する復興祈念公園と全体のパークデザインなど、総合的に考えるべき。ここを復興拠点ツアーの拠点としていくことも必要だと思われる。
- ・復興ツアー、教育旅行においては、旅行代理店との連携などを行い、単なる博物館になってしまわないよう、工夫をしてほしい。

(参考) イノベーション・コースト構想推進企業協議会との意見交換

企業連携の可能性や観光・集客に関する検討のため、イノベーション・コースト構想推進企業協議会と意見交換を行いました。

この意見交換は、福島県全体（県民、公共、民間）の参加によって事業を進めていくに当たり、福島イノベーション・コースト構想との効果的な連携の手法について検討することを目的としました。

本構想の段階では、具体的な連携手法へ至る前段階として、お互いの持つ意見や考えを自由に意見交換し、今後の課題への参考とします。

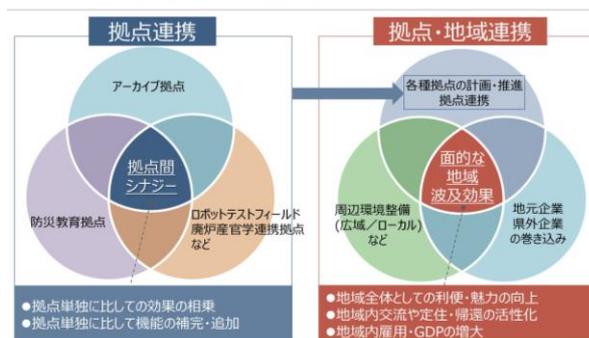
*参考 イノベーション・コースト構想推進企業協議会 資料より

【福島イノベーション・コースト構想における拠点・地域連携への取組】

拠点連携や広域的な周辺環境整備との連携などによる拠点横断・地域俯瞰での面的な相乗効果の創出に資する民間主導での「拠点・地域連携プログラムの具現化」を目的とした拠点・地域連携部会を設置した。

同部会では、拠点・地域連携プログラムの芽出し・企画検討・具現化、国・県等との意見交換、同プログラムの提案・提言を実施していくことを予定している。

拠点・地域連携のイメージ



【観光交流・集客に関する意見交換】

(趣旨)

アーカイブ拠点施設周辺には、復興祈念公園を始め、周辺市町村の交流施設や震災関連施設が整備される計画がある。それらのゲートウェイとなる施設として、将来的な教育旅行の受け入れ等も見据えていきたいので、その場合にアーカイブ拠点施設に必要な要素や規模など、観光や集客の視点からご意見いただきたい。

(意見)

- ・ 伝統工芸や食、文化など、震災以外のコンテンツにも触れられるような、多方向からアプローチできる施設であると旅行会社としてツアーを組みやすい。
- ・ 団体ツアーを考えた場合、近隣の農作業体験等と組み合わせた研修プログラムなどを組み、福島の産業全体に関するツアーなどを実施していくことも検討できるのではないか。
- ・ 全国の自治体や防災関係者のメッカのような場所になっていければ良いのではないか。そのためにも拠点間連携は重要であり、防災だけではなく、まちづくり、教育、歴史、環境など、様々な視点でのフィールドと捉えれば、大学や専修学校からの集客ができると思う。分野別にヒアリングし、需要に合わせたコンテンツづくりが大切だと思う。
- ・ 例えば大学の研究室と提携することで、その大学のセールスポイントにもなり、かつ、この施設の定期的な利用、集客にもつながるような仕組みづくりも可能ではないだろうか。
- ・ 他拠点も含めて、アクセス性は課題である。宿泊や移動の手段は、改めて各拠点で連携して検討を進めるべき課題として認識している。

(意見を受けて)

災害、防災、原子力等のコンテンツに限らず、福島県のもつ魅力や産業なども含めた幅広い可能性をもつフィールドとして、どのように機能していくことができるか、検討していきたい。

【企業との連携に関する意見交換】

(趣旨)

東日本大震災を契機に、企業のCSR活動がより活発化しているという背景を、アーカイブ拠点施設でも伝えていくべきだという意見が基本構想策定検討会議でも挙がっている。また、県としては、災害時の企業の行動や活動を記録としてアーカイブ拠点施設に蓄積したいという意向もある。こうした企業活動に関する情報の収集方法や、開館後のアーカイブ拠点施設と企業の関わり方について、ご意見をいただきたい。

(意見)

- ・ 企業の震災への対応やCSR活動の記録の有無や形態は、企業によって様々である。特に、震災直後から復旧等に携わった企業は、その混乱の中できちんとした記録が残っているかどうか、疑問である。
- ・ 社内に蓄積されている場合でも、その情報を提供するとなると、情報公開に関する企業側の制約もある。
- ・ 情報収集の呼びかけは、企業ごとではなく業界団体を通じて、協力を要請したほうが、公平性もあり、集まりやすいのではないだろうか。
- ・ テーマや目的を絞って、何を知りたいのかということを明確に示してもらったほうが企業側としては対応がしやすいと思う。
- ・ 開館後の企業と施設との関わり方については、展示への参画なのか、情報の提供なのか等、整理する必要がある。
- ・ 企業としてのメリットがなければ、積極的な協力がしにくいのも事実だと思う。
- ・ 企業出展等を要請する場合には、ルールや目的をはっきりとさせておく必要がある。
- ・ 研究等の人材交流については、企業だけではなく、専門機関や大学などを含めた運営形態の調整が必要と思われる。
- ・ 今後の展開については、継続的に意見交換を行い、検討していくことが重要であると思われる。

(意見を受けて)

テーマや目的を整理し、具体的な仕組みづくりにつながるよう検討していきたい。